トピックス 2. サンタル族(Santal)の鋤(すき)

Why Santal Tribes are so much Attached to the “Wooden” Farming Tools?

写真画像

④ 農耕牛の鋤(すき)

⑤ 木製採水桶(おけ)

⑥ 木製打穀(だこく)具

⑦ 鉄製斧(おの)

画像出所

アジア経済研究所図書館

「開発途上国フォト・アーカイブス」、

「フォト・エッセイ：１９６０年のインド：「変化」の予兆を写す」

(田部昇：元アジア経済研究所理事・明治学院大学名誉教授)

【写真撮影者：④（故）松谷賢二郎；⑤，⑥，⑦　田部昇】

説明

１９６０年代始め：ベンガル稲作地帯サンタル農民の農機具（犂(すき)）は木製。
【写真画像―④】農耕牛の鋤(すき)：農耕牛に引かせ農夫が押す農具。モンスーン到来の直前、６月初旬に始まる水田の準備作業。
【写真画像―⑤】木製採水桶(おけ)：貯水池から水を引く。
【写真画像―⑥】木製脱穀具：雨期明けに収穫し脱穀する
１９９０年代始め：サンタル農民の農具は木製から鉄製へ。
【写真画像―⑦】。伐採用の鉄製斧(おの)：木製から鉄製に変わった。

インド　ベンガル地域に数千年の伝統と独特の生活様式を守り続ける少数民族のコミュニティーがある。人類学上、これらの住民をサンタル族（Santal）と呼ぶ。
最初にこのサンタル族の部落を訪ねたのは、1961 年、故福武直先生（社会学者）とご一緒にカルカッタ（現コルカタ市）の北、詩聖 R.タゴールの創設になるビシュワ・バーラティ大学に数日間投宿したときのことである。サンタル族はいまに、木製の農具（鋤(すき)・斧(おの)・犂(すき)・鋤(すき)など）をかたくなに守り続ける典型的な農耕種族であり、伝統社会に生きる山地民族である。数世紀の数奇な歴史を経て次第に山地から平野部に移動しながら農耕文化の世界に融和してきた。このサンタル族のことはインドの文化人類学者や農村社会学者が研究対象としてとりあげているがその中でラーマクリシュナ・ムケルジー博士（Ramkrishna Mukherjee）の報告には興味深い指摘がある。＊

> 「宣教師の経営する農園では、サンタル族の農民たちは鉄製の農具を能率良く使いこなす。しかし、自分の畑では与えられた鉄製の鋤を捨て、先祖伝来の木製の農具を使用する。」（１８６ページ）

この記述は１９３０年頃、ある著名な人類学者が行った現地調査の報告を引用した一文でありラーマクリシュナ・ムケルジー博士はこのサンタル農民の不可解な行動をどう解釈するかという社会科学の方法論に一石を投じた。経済学者は市場の不完全性を理由に挙げるだろう。自分の畑は自家消費の為であり、生産余剰の出荷・販売など市場化はあり得ない。市場の未発達が農民の生産意欲を阻害する。社会学者はこれを市場の外側の問題だというに違いない。農園労働者として「強制」されているからである。歴史学者は多分、「１８５５年サンタルの反乱」に見られる植民地主義にそ

のカギを求めるだろう。イギリス人農園主への敵意がある。文化人類学者は文化相対主義を主張する。所与の部族文化の中では合理的な行動と解釈すべきだという。**

いずれも個々のディシプリンの内側では説明になりうるが、全体像は依然として不明瞭といわざるを得ない。この問題を提起した博士はサンタル農民の不可解な行動を理解するには、現在の社会諸科学の知識や単一学問領域からのアプローチは不十分であって隣接諸科学の統合と協働が必要だと説く。

R.ムケルジー博士は当時、私の留学先であるインド統計研究所（現在、国立インド統計大学）社会学研究部門に所属しており、１９６１年訪印された福武直先生（社会学）はこの事例に深い興味を示された。そこで、先生とご一緒して西ベンガル州ビルブム村のサンタル族農村を訪ねることとなった。福武直先生はその後、中根千枝先生（文化人類学)、大内力先生（経済学）と一緒にベンガル農村調査を進めることになる。

ところで私とサンタル族との再会はその後、１９９０年、３０年振りにジャムシェドプル(Jamshedpur)工業地帯で木製の農具を捨て、鉄製の鋤などを採り入れ始めた新しい農民の姿に接したときである。 ほんの半世紀前までは、かたくなに拒否し続けた「鉄の文化」をいま、なにげない日常のものとして受容する社会を見た。農機具文化の伝播が一見、「伝統社会」と規定されたこの農民の間に確実に進行している。この社会変化を目前にして、３０年前（１９６１年）サンタル農民の家に福武先生と一夜を過ごしながら、「変化のない社会」は何故だろうか、など話し合った記憶がよみがえる。そしていま、もし先生が存命であったならば、予想だにすることのできない仮説が否定され、「変化を受容する社会」はどうしてだろう、という新たな問いに社会学者の解釈を聞くことが出来たであろうことを惜しむ。

サンタル族の受容する社会と文化は今もなお、社会学と経済学の、そして社会諸科学間の深い対話の必要性を示唆している。R.ムケルジー博士の言葉を使えば、サンタル族の変化は“What is it”、“How is it”、“Why is it”を問う知的操作の努力を意味する。
こうして私のカルカッタ滞在中（１９６０～６２)、はじめての「サンタル族の鋤」との出会いが私の学際研究への思考を促す出発点となった。

出所

初出：明治学院大学国際学部付属研究所　付属研ニュース。レター第９号（１９９１年１０月７日）。

参考文献

＊　Ramkrishna Mukherjee, The Sociologist and Social Change in India Today, New Delhi, Prentice-Hall of India (Private) Ltd.1965. Pp.229. Chapter 7 Orientation for Depth Analysis, Role of Tradition in Social Change

＊＊N.Kaviraj,　Santal Village Community and the Santal Rebellion of 1855, Calcutta,Subarnarekha,2001.　Pp.222.